

## ご挨拶

本日はお忙しいおり、私どもの演奏会にお越しいただきありがとうございます。皆様に再びお会いできましたことを大変幸せに思っております。本日初めていらした方も、気に入ってましたら是非今後も足をお運びください。

ブルーメンにとって 49 回目の定期演奏会となる今回は、指揮に 2014 年の「マタイ受難曲」以来の共演となる新通英洋さんをお迎えし、モーツァルト「プラハ」とブルックナーの交響曲第 7 番を演奏いたします。「プラハ」はモーツァルトが三大交響曲を産み落とす直前の、「7 番」はブルックナーが楽壇デビューを果たす契機となった、それぞれ転機に書かれた名曲です。作風の異なる両者とはいえ、ときおり顕れる激烈な転調の妙など存分に味わっていただければと思います。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

（総務 武井 出）

## ブルーメン・フィルハーモニー

### Blumen Philharmonie

1993 年 8 月、指揮者・寺岡清高氏の提唱により 1 回きりのオーケストラとして発足。同年9月の演奏会が好評を呼び、アマチュアとしての良さを生かしつつも、技術・音楽性の両面において一流となることを目指した常設オーケストラとして再スタートした。

現在都内を中心に活動中。様々なオーケストラ・室内楽団体での経験豊かな社会人・学生により成り立っている。これまでに指揮者として、寺岡清高、ゲルハルト・ボッセ、中田延亮、金山隆夫、伴野剛、桑田歩、山田和樹、森口真司、寺本義明、堀伝、河原哲也、大森悠、武藤英明、角田鋼亮の各氏らと共演。2013 年に創立 20 周年を迎え、第 40 回記念定期演奏会では寺岡清高氏、東京オラトリオ研究会との共演でベートーヴェン「第九」を演奏した。定期演奏会のほかにも、依頼演奏を含む 12 回の特別演奏会、「室内楽の悦楽」などを行っている。認定 NPO 法人「おんがくの共同作業場」主催公演において、2016年5月にはマーラー「交響曲第8番」を、2018年6月にはヴェルディ「レクイエム」他を共演した。「ブルーメン (BLUMEN)」とはドイツ語で「花」の意。毎回の演奏会で、舞台上に美しい花を咲かせるような、新鮮で生氣あふれる演奏がしたい、との思いからつけられた名前である。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

私どもブルーメン・フィルハーモニーは、2003 年 4 月に創立 10 周年を記念し、「ブルーメン友の会」の制度を設けました。会員の皆様には、定期演奏会へのご招待をはじめ、私どもの活動について当団よりご案内させていただいております。ぜひ大勢の方にご入会いただき、今後とも一層のご支援を賜りたく、ご案内申し上げます。

## 【ブルーメン友の会 会員ご芳名】

青木 素子 様
足助 浩 様
茂原 洋子 様
鈴木 美波 様
高橋 公子 様
高橋 大八郎 様
中村 亨 様
羽生 健一 様
林 亜由美 様
福井 常忠 様
馬淵 明子 様
宮本 絢子 様
森 洋子 様
山崎 とみ 様
渡辺 雅子 様
K.K. 様
T.K. 様
M.M. 様

### 【ご入会特典】

- 当団演奏会（年2回の演奏会、特別演奏会等）を無料にてご案内、ご招待いたします
- 演奏会の録音をご希望の方には実費にてお送りいたします（演奏会場またはメール〈blumentomo@gmail.com〉にてお申し込みください）
- 感謝を込めて、会員の皆様のご芳名をパンフレットに掲載させていただきます

### 【ご入会方法】

会費 一口 3,000 円（有効期間：定期／特別演奏会 計 2 回分）を郵便振替にてお振り込みください

（口座番号：00160-5-157971 口座名：ブルーメンフィルハーモニー）

## 新通 英洋

### Hide Shindori

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

桐朋学園、モスクワ音楽院において指揮を学ぶ。秋山和慶、小澤征爾、尾高忠明、黒岩英臣、高階正光、L. ニコライエフ、V. シナイスキー各氏に師事。英国ロイヤルオペラハウス、イングリッシュ・ナショナルオペラ、BBC ウェールズ交響楽団等のリハーサルで研鑽。第 5 回フィテルベルク国際指揮者コンクールにおいて第 2 位ならびに特別賞受賞。ワルシャワでシンフォニア・ヴァルソヴィアを指揮してヨーロッパ・デビュー。W. チェン、E. モギレフスキー、G. シャハム、佐々木典子、高橋多佳子、横山幸雄各氏をはじめとする多くのソリストと共演。独奏者からの信望も厚い。近年はアルマ・マラー歌曲全曲演奏など、管弦楽の響きが醸成される異色派伴奏ピアニストとしても評価が高まっている。日本テレビ「深夜の音楽会」にも出演。これまでに大阪フィル、九州響、群馬響、札幌響、東京響、東京シティ・フィル、東京フィル、名古屋フィル、日本フィル、読売日響、ポーランド国立シレジア・フィル、シンフォニア・ヴァルソヴィア等を指揮。2015 年からロイヤルバンコク交響楽団に客演を続けており、バンコク・ポスト紙で「オーケストラと指揮者の出会いはお互いに本当に幸福だった。ロイヤルバンコク交響楽団と彼の真の勝利体験に観客は熱狂した」と絶賛された。また 2017 年 9 月、台湾・香港・アメリカ・日本の医師たちによって結成された第 1 回アジアンドクターズオーケストラ日本公演に参画し、小児がんの子どもたちを支援するチャリティーコンサートなど音楽による社会福祉やボランティア活動にも力を注いでいる。オペラでは「こうもり」「森は生きている」「後宮からの逃走」「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「ラ・ボエーム」等を指揮し高く評価された。ライフワークとして探求するベートーヴェンの交響曲のほか、バッハ「マタイ受難曲」、ヘンデル「メサイア」等、宗教曲や合唱音楽にも意欲的に取り組んでいる。大阪音楽大学特任教授、世田谷フィルハーモニー管弦楽団音楽監督。



## 曲目解説

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

## モーツァルト 交響曲第 38 番 ニ長調「プラハ」

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

1786 年 5 月 1 日にウィーンで初演されたオペラ『フィガロの結婚』は、好評をもって迎えられた。同年 12 月にはプラハの劇場でも上演され、翌 1787 年 1 月には劇場からの招待によりモーツァルトみずからプラハに赴き『フィガロ』の上演に立ち会い、さらに当地で上演する新たなオペラの依頼を受けた。これが『ドン・ジョヴァンニ』となった。こちらは同年秋にプラハで初演、翌 1788 年の 5 月にはウィーンでも上演され、いずれも大成功をおさめた。

交響曲第 38 番は、相次いで生まれたこの 2 つの傑作オペラに挟まれるようにして産み落とされた。自作品目録には「1786 年 12 月 6 日」の日付が記入されている。プラハの劇場に招待された際の公開演奏会（アカデミー）で初演されたことから「プラハ」の愛称で親しまれているが、モーツァルトはプラハでの上演を念頭にこの曲を書いたわけではないようだ。

モーツァルトの交響曲には珍しくメヌエット楽章を欠く 3 楽章構成であるが、楽曲をとおして創意と着想がぎっしりと詰め込まれており、オペラはもちろんのこと、弦楽四重奏曲やピアノ協奏曲で培われた作曲のテクニックが存分に発揮されている。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 1 楽章 アダージョーアレグロ

序奏のアダージョは不安と緊張が支配し、来たる『ドン・ジョヴァンニ』の「地獄落ち」を彷彿とさせる。

アレグロの主部では、ひそやかなシンコペーション、その中からうねりのようにあらわれる動機、管楽器のファンファーレなど、「主要主題」と呼ぶにはあまりに多くの要素が次々とめまぐるしく提示される。しっとりとうたわれる副次主題も、繰り返されるたびに短調の陰影が添えられたり伸びやかな対旋律が加えられたりと、凝ったつくりになっている。金管楽器とティンパニの連打に導かれて、冒頭ではひそやかなうねりだった動機が今度は堂々と力強く回帰して前半が締めくくられる。後半は主部の冒頭のファンファーレの対旋律にはじまり、数々の素材が組み合わせられて自由自在に展開してゆく。再現部でもモーツァルトのセンスが光り、けっして単なる繰り返しにはならず、意表をつく転調や、さりげない変化音が新たな彩りを与える。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 2 楽章 アンダンテ

「パストラル（牧歌）」の様式による緩徐楽章。8 分の 6 拍子のリズムにのせて、穏やかに持続する低音の上に歌唱的な旋律が紡がれる。旋律に編みこまれた半音階や、ときおり顔をのぞかせる短調の色彩は、まるでオペラに登場する女性の揺れる恋心を描いているかのよう。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 3 楽章 プレスト

『フィガロの結婚』第 2 幕のスザンナとケルビーノの小二重唱「開けて、早く」の音楽を素材としている。チャーミングな副次主題の部分を除けば、冒頭の動機がほとんど楽章全体を支配しており、素材の多様さで勝負した第 1 楽章とは対照的である。

## ブルックナー 交響曲第 7 番 ホ長調

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

ブルックナーは、モーツァルトの交響曲からほぼ一世紀の時を隔ててなお、古典的な交響曲の形式を範としつつ、その可能性を模索をし続けた作曲家であった。彼が遺した 9 曲（+α）の交響曲は、彼の生涯にわたる壮大な試行錯誤の結果であるとともに、交響曲というジャンルの歴史が辿り着いたひとつの終着点でもある。

交響曲第 7 番には、そんな彼が追い求めた形式の理念がもつとも洗練されたかたちであらわれている。1883 年 9 月の完成後ほどなく上演を重ね、その後も改訂の手が加えられなかったことも、完成度の高さの証左といえる（それでもなお、版によって楽譜の微妙な差異は存在する。本公演では、ハース版をベースにしつつ、自筆総譜および諸版も参照した独自のバージョンで演奏する）。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 1 楽章 アレグロ・モデラート

ヴァイオリンのトレモロの靄のなかから、光の射す彼方を仰ぐかのように、主要主題がチェロとホルンによって伸びやかにうたわれる。不安定な和声に支えられた音階的な旋律をもつ副次主題と、おどけたようなリズムの音型がユニゾンで繰り返される結尾主題が続き、徐々にボルテージを高めて頂点が形成される。展開部では 3 つの主題が反行形（音高の動きが逆になったもの）をともなって次々と示される。コーダではティンパニの長いトレモロによる持続低音の上に、主要主題が最弱音から徐々に楽器を増やしつつ繰り返され、ホ長調の主和音の大きな奔流となって幕切れとなる。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 2 楽章 アダージョ：きわめて厳粛に、きわめて遅く

ブルックナーの交響曲ではじめてワーグナーチューバが使用された楽章。嬰ハ短調の重苦しい主題のなかに、どこか恍惚とした艶めかしい表情が見え隠れする。3 拍子となる中間部は、夢を見ているかのような浮遊感に包まれている。ふたたび主要主題があらわれ、今度はト長調の頂点を築く。2 度目の中間部ののち、3 度目の主要主題はハ長調のクライマックスめがけて歩みを進め、最高潮に達した瞬間、シンバルとトライアングルの一閃が輝かしいきらめきが放たれる。そして、チューバによる嘆きのコラールとホルンの慟哭ののち（ワーグナーの訃報にふれてこの部分を書いたと言われる）、音楽は長調で安らかに消えゆく。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 3 楽章 スケルツォ：きわめて速く

前楽章の余韻を感じさせる円を描くような伴奏音形の上に信号ラッパのような主題が奏される。やや一本調子ではあるが、無骨に頂点へと向かってゆく諧謔的なスケルツォと、うららかな午後のような牧歌的なトリオ。

2013年4月、創立20周年記念演奏会にて、新通英洋さんと共演した。

### 第 4 楽章 フィナーレ：動きをもって、しかし速くなく

鋭い付点が特徴的な主要主題（第 1 楽章の冒頭主題から派生したもの）と、コラール風の副次主題、主要主題を全オーケストラのユニゾンで激烈に咆哮する結尾主題からなる。展開部と再現部は一体化し、結尾主題→副次主題→主要主題の順で主題の再現がなされる。コーダではふたたびティンパニの持続低音の上にあらわれた主要主題は第 1 楽章の主要主題へと収斂し、円環のうちに曲を閉じる。